

ラベンデュラ (ラベンダー) バンデラ

L. stoechas

学名: *L. stoechas*

種子粒数の目安(チューンドシード): 900 から 1,000 粒/グラム

開花特性と要因

- コンパクトで花数の多い実生品種
- 日長による影響: 相対的(facultative)長日開花植物
- 低温処理: 不要

プラグ生産ステージ

培地

水はけがよく、ピート主体の新しいプラグ用培地を使用する。培地の pH は 5.5 から 6.0、また培地の初期養分は EC:1.0 から 1.2mmhos/cm とする

播種

288 穴あるいは 180 穴トレイに 1 粒播種する。播種後はパーミキュライトで軽く覆土する

※ 覆土は厚くし過ぎないこと。その場合、発芽生理に影響し、著しく発芽率が低下するので注意する

ステージ 1 - 発芽日数は概ね 3 から 5 日。10 から 15%の幼根発現を目視で確認できた段階で発芽チャンバーから取り出し、徒長を避けるため、16 から 18℃の温度条件で管理する

地温: 18 から 20℃

光条件: 発芽時に光は不要だが、育苗初期の徒長を低減する効果がある

水分: ステージ 1 では、水分レベルを適度に湿潤(level 4)の条件で維持する

湿度: 幼根が発生するまでは相対湿度を 95 から 97%とする

ステージ 2

地温: 16 から 18℃

光条件: 26,900 ルクス(2,500 f.c.)を上限とする

水分: 水分レベル標準/中庸(level 3)からやや湿潤(level 4)に維持し、根が培地中を十分に浸透するよう促す

肥料: 硝酸態肥料をレート 1(100 ppm (N)以下、EC: 0.7mmhos/cm 以下)の濃度で与える

ステージ 3

地温: 10 から 14℃

光条件: 26,900 ルクス(2,500 f.c.)を上限とする

水分: 水分レベルを下げて、標準(level 3)の状態まで乾かして管理する

肥料: 肥料の濃度をレート 2 (100 から 175ppm (N)、EC: 0.7 から 1.2mmhos/cm)へ上げる

矮化剤: 原則不要であるが、必要であればステージ 3 において、B ナイン(daminozide)を 2,500ppm で処理が可能

湿度: 相対湿度を 70 から 75%で維持する

ステージ 4

地温: 10 から 14℃

光条件: 適正な温度条件であれば 54,000 ルクス(5,000 f.c.)まで可能

水分: ステージ 3 と同様

肥料: ステージ 3 と同様

※ *L.stoechas* は、プラグ育苗の段階では温度が高いとすぐに軸が伸びてしまうので注意が必要である。そのため初期の育苗においては、プラグ苗の幼根を 10 から 15%を目視できた時点で、チャンバーから速やかに取り出すことが重要である。さらに立枯れ予防のため殺菌剤を散布し、十分に換気された条件を作り、相対湿度を低く保つように管理する

鉢上げから出荷まで

コンテナサイズ

10 から 15cm ポット: 1 本(1 プラグ)植え

18cm 前後のコンテナ: 1,2 本(1,2 プラグ)植え

用土(培地)

水はけがよく、ピート主体の新しい用土を使用。培地の pH は 5.5 から 6.0、用土(培地)の初期養分は EC: 1.0 から 1.2mmhos/cm とする

苗の移植

バンデラを鉢上げする際は、株の底部や分枝基部がボトリティスに感染しやすくなるので、深植えしないように注意する

温度(最適条件)

昼間温度: 18 から 20℃

夜間温度: 12 から 16℃

※ 温度が 5℃を下回るような場合は、霜除けなどを用いて凍害を防止する

光条件

温度条件が適正であればできるだけ高く維持する

日長条件との関係

バンデラは相対的(facultative)長日植物である

かん水

培地の水分は標準(level 3、培地の色調が褐色ないし黒褐色)を維持する。次のかん水までに培地の表面が乾いているような状態とするが、根に影響が現れるような極端な乾燥は避ける

※ また出荷の直前には過かん水を避ける。培地の水分を標準(level 3)として、葉に水滴が残らないようにする

湿度

相対湿度が75から80%を超えないように管理する。とくに午後の遅い時間や夜間の湿度管理に注意する

肥料

バンデラは、軽めないし適度な肥培管理が求められる品種である。レート2(145から175 ppm(N), EC:1.0から1.2mS/cm)の濃度の肥料を与える。生産の後半では硝酸比でカリウムの割合を増やす

※ 週に一度、硫酸マグネシウムの水溶液(1リットルの水に0.5から1グラム)を軽く散布すると、株の状態が良くなる。ただし散布後はかん水して、培地に余分な塩成分が残らないよう十分に注意する

矮化剤(PGR)

原則不要であるが、必要であれば生産初期の段階でB ナイン(daminozide)を2,500ppmによる処理が可能である

ピンチ

ピンチは不要である

冬場の温度が厳しくない土地での作型

平均的な生産期間

播種から移植まで(288穴トレイ): 5から6週

180穴トレイを使用する場合はさらに期間を要する

【通常の作型】

移植から開花まで(288穴):

11から15週(鉢上げは早春ないし春期)

播種から開花まで:

16から21週

【越冬の作型】

※カリフォルニアのような冬の温度が厳しくない土地での作型
9月上旬から下旬(wk36から40)の播種で、翌年2月下旬から3月(wk9から12)にかけての自然開花が可能

移植から移植まで(288穴): 7から8週

移植から開花まで: 18から19週

播種から開花まで: 25から28週

病例等

害虫: アブラムシ、ハダニなど

病気: リーフスポット、フィトフィトラ、ボトリティス、炭疽病などの細菌感染や根腐病など

植物生理

生産期間中の乾燥や水切れによるストレスの負荷で、開花のメカニズムに影響が現れ、蕾をもつてもすべてが開花しないことがあるので、かん水の管理には注意が必要である

出荷時の注意点

高温期のお荷に際して、お荷(配送)箱内部の湿度が高いと個体への病気が誘発され、また株の品質を損ねることがあるので注意しなければならない。お荷の直前には過かん水を避けて、培地の水分を標準(level 3)とし、葉に水滴が残らないように管理する。また、病気の予防や品質維持の観点から、通気孔を備えた配送箱を用いることが望ましい

店舗納品後の注意点

ボトリティスなどの病気を予防するためにも、真上からのかん水は避ける

定植場所や配置について

- バンデラは初年開花する非耐寒性宿根品種。USDA 耐寒性指標はゾーン7から10(最低温度マイナス18℃)
- 春先は(遅い)降霜の懸念がなくなってから日あたりのよい場所へ定植する
- 花期の長い、セルフクリーニングされる品種
- 高温にも強い品種(ただし夜温が下がり、湿度が低いことを条件とする)
- 定植時は、株間を30から35cmとって、水はけのよい土へ植える

注意点:

- 同品種を生産するにあたって、ここで示されている栽培情報は基本的な参考資料としてご利用ください。生産された植物は、気候条件や地理的な緯・経度、また作型の時期、ハウスの環境によって結果が異なることがあります
- 殺虫・殺菌剤、また矮化剤の使用についての記載はあくまでもガイドラインであり、必ず使用方法を十分にまた正しく読み、使用者の自らの責任のもとでそれに則った正しい使用方法とるようにしましょう

EC 値について: EC(電気伝導度)は、ピート主体の北米の用土を算出の基準としているので、条件によっては適合し得ない場合もあります。